

新聞記事に見る 古代史の世界

吉田裕紀 大阪府立河南高等学校教諭

1 新聞活用のねらい

- ①古代史の表記には、推定的な部分が多い。新聞記事を利用して、新たな発見やそこから導き出される事実を確認する。
- ②新聞記事によって、教科書の表記が必ずしも確定的でないことを気づかせる。

2 授業構成

ねらい

①古代エジプト王朝の墳墓群、「王家の谷」に興味を持たせる。

②「王家の谷」の歴史的な価値を確認させる。

③「盗掘」が行われる背景を考えさせる。また、「盗掘」によって生計が成り立つほどの資産価値が現在でも存在していることに気づかせる。

④巨大なピラミッド建設に多くの人々が駆り出されたとすれば、どのような人たちであったかを考えさせ、奴隷説を確認させる。

⑤奴隷説が否定されている理由を確認させる。

⑥奴隷説は、現代の視点から考えられていることに気づかせる。

おもな学習活動

①「盗掘の村ついに幕」の記事を読む。

資料▶ 1

指導の
ポイント

古代エジプト王朝の歴史、ツタンカーメン王などの話題に触れる。

②教科書・資料集を利用して、「王家の谷」の位置や歴史的な意味を確認する。

③再度、記事に戻って「盗掘」が行われていた事実を確認し、「盗掘」が行われていた背景を考える。

指導の
ポイント

記事中の「泥土の像」や「外国発掘隊に雇われて生計を立てる」といった記述に気づかせる。

④ピラミッドについての資料を配布し、ピラミッド建設について一般的に語られている側面を確認する。

資料▶

ヘロドトス「歴史」岩波文庫

資料▶

「ビジュアル版世界史物語」講談社

⑤「ピラミッド建設 奴隷でなく労働者？」の記事を読ませる。

資料▶ 2

⑥記事から、当時の人々の状況を考える。そして奴隷説の違いを考える。

3 評価の観点

- ①歴史的な価値がどのような視点で考えられているかに気づけたか。
- ②歴史的事実が、推定に基づいて作り出されていることを理解できたか。
- ③新しい事実から、今までの歴史的事実を再点検することができたか。

資料1 中日新聞 1997. 1. 26 付朝刊

【カイロ25日深田実】エジプト考古庁は、のぼろのエジプト古代王朝の墳墓群がある同国中部・ルクソールの王家の谷にあるクルナ村三百五十戸を取り壊した、と発表した。クルナ村は貴人の墳墓群の上に立ち、村人が自分の家の床下から掘り出した副葬品や財物を密売ルートで売りさばく村として有名だが、ついこそその幕を開けていった。

盗掘の村 幕について



『王家の谷』のクルナ村 エジプト考古庁が取り壊し 住民ら移転へ

村は、ツタンカーメン王 人たちは、相次いで押し寄り切ってきた。ハッサン考古庁長官は記者会見で「村の下に眠る墓の数々。今世紀初めから、エジプト学研究のため移転話が出ているが、村は拒絶した。違法な埋葬品売買に手を染めたといわれ、歴代政府は、どの王族、貴族の墓を密売ルートで売りさばく村として有名だが、ついこそその幕を開けていった。国産秘史料の海外流出に苦ものかも未解明だ。二つかアバートなどに引っ越す。

資料2 読売新聞 1998. 7. 29 付朝刊

ピラミッド建設

奴隷でなく労働者？

【カイロ27日＝岡本道郎】泥のピラミッド建設を認め、古代エジプトのピラミッド建設に携わった人々が一相応の処遇を受けていたと、一部で言われるように奴隷ではなく、脳外科手術と無む議会の最近の発掘調査でわゆる治療を受けた人種であった。

エジプト 発掘調査

作業員に外科手術跡、墓には役職名

五百年前の古王国第四王朝時代の骸骨六体を発見した。エックス線調査の結果、二十七日付アル・アファ跡があることが判明。ミッド建設作業員の墓、約四千年のや、腕に副木をさすものも見つかった。

4 発展・応用例①

古代史に関する記事は少ない。授業で利用するためには、資料のストックが不可欠である。生徒の学習活動に取り入れる場合には、世界史関連の新聞記事の切り抜きを続けさせ、関心を持たせておく。

また、古代史に関するニュースは発信元が同じで、それほどの差異が生じない場合が多いが、教科書や資料集では触られていない歴史的な事実が掲載されることがあるので、新聞記事の利用は長期的な視野にたって考えることが必要である。



「エジプト大使館-エジプト学・観光局」

4 発展・応用例②

古代史学習においては、特設的な授業や導入的な授業で新聞記事を有効に利用することができる。

例えば、「万里の長城」に関する記事を使用して、中国の王朝の持った絶大なる権力を実感させ、中国の歴史に対する関心を高めさせることができる。また、記事を導入に利用することによって、資料集や図説などとは違った側面から、現代を映し出し、生徒一人ひとりに歴史を身近に感じさせることも可能である。以下の展開例は、現代においてもさまざまな形で、「万里の長城」とかかわりを持っている人々の活動を知ることにより、歴史的な遺物に対する関心や、授業への参加度を高めることを目標としている。

具体的には、

- ①新聞記事を読ませて「万里の長城」に興味を持たせる。 **資料▶ 3**
- ②「月から見える唯一の構造物」の記述から、教科書・資料集から「万里の長城」の位置や大きさを確認し、白地図に万里の長城を記入させ、大きさを実感させる。
- ③資料集で長城の造り方を調べさせる。
- ④「地図に載っていない長城」の記述に注目し、どのように確認したかを確認する。
- ⑤スペースシャトルの観測したデータで確認したことに気づかせる。 **資料▶ 4**
- ⑥長城が単に中国の歴史的な遺物ではなく、その維持や再生にかかわっている日本人の活動もあることを気づかせ、現代の長城の様子について調べさせる。 **資料▶ 5**
- ⑦長城は単なる歴史上の存在ではなく、さまざまな形で現在とかかわり、また生徒自身もかかわれることを気づかせる。
- ⑧「万里の長城」の歴史的意義を話し合う。また、自分たちがかわれる点はないかを調べさせる。

資料 4 西日本新聞 1998. 11. 3付朝刊

【北京(日共電)】二日の新華社電によると、中国内陸部の寧夏回族自治区にあるモウス砂漠の地中から、隋代(五八一―六一八年)に建造された長さ二十五キロの「万里の長城」が発見された。

この長城は、米国のスペースシャトル「エンデバー」が一九九四年四月に宇宙からレーザー観測したデータを、米中の研究グループが解析し存在を判明。長年の猪突業で、厚い砂に埋もれた約十四百年前の長城の遺跡が確認された。

砂漠の中

掘った!

あった!!

エンデバー観測が発端▶▶隋代の「万里の長城」

資料 5 毎日新聞 1998. 5. 2付夕刊

荒れ果てた「万里の長城」周辺の山ろく。21世紀に緑がよみがえろうとしている



万里の森よ よみがえれ



現地の生態系を調べる宮脇昭さん(右)

日中協力で再生計画

世界文化遺産の「万里の長城」周辺に緑をよみがえらせようという「万里の長城・森の再生プロジェクト」が日中協力で進められている。樹木の伐採により荒れ果てた山ろくに、かつて森を形成していたモウコナラを中心とした樹木の苗木39万本を3年計画で植樹する。7月の第一回植樹には、日本と中国から2000人規模の植樹ボランティアが参加する見通しだ。

ボランティア39万本を植樹へ

植樹を企画したのは、環境団体への助成や環境保全活動を繰り広げているイオングループ環境財団。1996年に開かれた日中環境問題国際シンポジウムの際、岡田厚也理事長(シャソコ会長)が提案し、北京市人民政府と同財団が共同で行うことになった。

これまでも、万里の長城周辺でマンギヒクなどの植樹の試みはあったが、いずれも成功していない。同財団は国際生態学会会長が提唱する方式の植樹に取り組みことにした。その土地に本来生育していた多種類の樹木の苗木を高密度に植える方式で、自然の生態系と同様に植物が競い合いながら生育する。すでに国内外600カ

所以で成功例が多い。長城の山ろくは、かつてモウコナラを主とする森だった。ところが、築城の際にレンガを焼く燃料として大量の樹木が伐採され、低い木や草しかない荒地になってしまった。

宮脇さんが団長を務める同プロジェクト調査団が山ろくの4カ所で、モウコナラの自然林を見つけた。中国側が89年秋にモウコナラの種子約80万個を集め、苗木を栽培した。90年以上が経ち、順調に育っている。最初の植樹は日中両国で、すでに日本からは市民約700人が申し込んでいる。宮脇さんは「10年ほどで森が形成されるだろう。植林範囲は長城の一部に過ぎないが、森と共存する長城を21世紀に実現する第一歩になる」と話している。

プロジェクトの問い合わせ先は同財団事務局(043・212・6002)。

【斗ヶ沢亮俊】

資料 3 1 朝日新聞 9 9 7 10 15 付夕刊



中国大陸の端から端まで6000キロに及ぶ万里の長城を、10年がかりで歩いて調べる「万里長城学術踏査隊」(福田久勝総隊長)が、6年目の調査を終えてこのほど帰国した。今年には標高約2000メートル級の険しい山岳地帯に入り、尾根筋をたどるように延びる長城の測量や周辺の植生、地質を調べた。平均年齢61歳。隊員は退職後の夢でもあった長城の感触を年ごとに自らの足で確かめゴールに一步一步近づいているが、傷みの激しい長城に胸を痛め、保存を呼びかけている。(社会部・村瀬成幸)

長城 5000キロ踏査

平均61歳、夢追って6年目

神戸の福田さんら

今年500キロ 山岳地帯を歩く

今年の長城踏査は七月二十五日から八月三十日の日程で、河北省・張家口から懷柔までの約五百五十キロを歩いた。大馬群山、軍都山の山岳地帯で、この部分の長城は約五百年前の明代に築かれたという。一行は総隊長の福田さん(左から)と神戸市灘区に日本入隊員四人のほか、通訳らサポーター役の中国人十一人が加わった。日本人隊員は会社や中学校教諭などを退職した「長城ファン」で編成。神戸・大山岳部OBの福田さん以外は登山経験は少なく、事前に岩登りの訓練などをして臨んだ。昨年までに踏査した砂漠地帯に比べ、山間部は起伏が激しい。がけでは福田さんが先頭に立ち、ザイルを岩場に固定し、隊員が後に続いた。ハシバミなど背丈以上に密生した低木が行く手をさえぎるものも多く、一時間に一キロしか進めない時も。地元の人には木の実を探りに来るくらいで近寄りず、一行は「なぜ、そんな所に行くのか」としばしば尋ねられたという。



尾根筋に延びる長城。北方民族の侵入(左から)を防いだ河北省大辺付近で長城の尾根の部分から、がけ下りするためザイルを固定する福田久勝総隊長(河北省張家口付近で、いずれも万里長城学術踏査隊写真)

傷み激しく保存呼びかけ

のろし台や敵楼を確認

土木技術者の福田さんは建設関連の会社に勤務中から、一月からも見える唯一の構造物」という万里の長城に興味があった。中国の歴史学者らでなる「長城学会」に細かく問い合わせたが、部分的な調査しかないという。「それなら自分で歩いて全体地図を作りたい」。福田さんは自由になれる退職後まで待ち、一九

九二年から賛同者と共に西端から歩き始めた。人工衛星を利用する装置で、現在地の緯度や経度、高度を確認。巻き尺でスケールを計測していく。今回は地図に載っていない長城を二カ所で計四十キロ分見つかり、回りにくいという。

五百キロほどの間隔で「のろし台」も見つけた。高さ約十メートルの円筒形で、敵の侵入を知らせる時に使われた。矢を放つための「敵楼」は、敵が侵入しやすいため、谷の両側に約二十カ所確認された。

あと4年 執念燃やす

福田さんは「長城は世界遺産。全調査を終えた時点で、将来のために保存すべき場所を選び、中国政府に進言したい」と話す。いずれもインターネットで世界には長城の写真を見てもなかなかった。観光地として有名な北京郊外の「八達嶺」など敷設所は改修されているが、ほかまでは手が届かないという。険しい旅だったが、尾元には白色のウスキソウなどが咲き、疲れをいやしてくれた。今回の旅で踏査距離は累計約五千キロ。一夢の実現まであと少し。年輪的にたまたま無理でできなくなってきたが、執念やりに旅の終わりは二〇一一年の予定だ。